

「聖戦大碑撤去の会」通信

「大東亜聖戦大碑」の撤去を求め、戦争の美化を許さない会

〒920-0024 石川県金沢市西念3-3-5

フレンドパーク石川5階「石川県平和運動センター」内

TEL076-233-2170 FAX076-233-2244

<http://www.ishikawa-herwa-center.gr.jp>

第4回「大東亜聖戦大碑」の撤去を求める全国集会

戦争の「記憶・責任」、そして「現在」



「大東亜聖戦大碑」が金沢市の石川護国神社に建立されてから早4年。聖戦大碑撤去の会は今年も全国の運動体や仲間呼びかけてさる8月7日に「第4回全国集会」を開催した。

会場となった石川県教育会館には約150人が参加。「学徒動員された韓国人が語る戦争とその後」と題して証言する予定であった

鄭琪永さん（1.20同志会会長）がピザの関係で来日できないという予期せぬハプニングがあったものの、急速「大東亜戦争は決して聖戦ではない。まぎれもない侵略戦争で、ほかの民族を辱める、あってはならない戦争行為だ」と訴えるメッセージ（全文は6P参照）を会場に寄せて参加者を激励。

集会では、小泉首相靖国神社参拝違憲アジア訴訟団や中国人強制連行・強制労働事件新潟訴訟支援団体からの報告を受けたほか、聖戦大碑の撤去と聖戦祭の中止を求めるアピールを採択して閉会した。なお、聖戦大碑の建立者側は翌8日に「第4回大東亜聖戦祭」を開催。中田清康実行委員長は「我々はいずれいなくなるが、正しい日本の精神を若者たちに伝えれば、若者たちは日本を守り、この碑を守り、永遠にこの聖戦祭を続けるだろう」と挨拶し、同氏が主催する「大東亜青年塾」の塾生22人が紹介された。

靖国訴訟は反戦訴訟



小泉首相靖国神社参拝違憲アジア訴訟団

事務局長 菱木 政晴

「殺させよう」とする仕組み

私たちアジア訴訟団（大阪）のホームページのタイトルは「殺さない、殺されない、殺させない」です。誰もが殺されたくはないだろうから、殺してはならないということですが、戦争というのはまさにこの問題であって、自分だけが「殺さない」と決意をすればそれで済むという話ではありません。

当然、「殺させよう」とする仕組みを止めさせる必要があるわけですが、その仕組みとして徴兵制や憲法九条の改悪があります。それでも、やらされるほう、つまり殺そうとする側が嫌々やっている状況であればまだいいが、殺させられる側が納得してやる、そしてそれを誇りにするという気持ちを育てる機能を持つのがこの大東亜聖戦大碑であり、あるいは忠魂碑、靖国神社です。

小泉首相は、どのような反対があっても首相に就任したら靖国神社に行くと言っていました。なぜ行くのかというと、戦没者に感謝と敬意を捧げるために行く。これと同じことを16年前に言ったのが中曽根です。彼は「米国にはアーリントンがあり、ソ連にも、他のどの国にも無名戦士の墓であるとか、国のために倒れた人に対して国民が感謝を捧げる場所がある」と言い、次に「当然のことである。さもなくして誰が国のために命を捧げるか」と本質を語っています。

「ありがとう」と「ごめんなさい」

日本の首相で初めて侵略戦争だと言ったのは、91年の細川首相の時です。この時、日本遺族会や英霊にこたえる会が危機感を持っていろんな宣伝をしました。当時、日本中の神社に配られた絵があります。お婆ちゃんと孫が向かい合って座っていて、孫が「お爺ちゃんは昔、戦争で死んじゃったんだって。お国のために死んだんだって。だから本当はみんなでお参りしなければいけない。でもね、お国の偉い人がお参りすると嫌な顔をする人がいるんだ。お婆ちゃん悲しそうな顔をしている。ねえ、お爺ちゃんて悪い人だったの？」と独り言を言っている絵ですが、ものすごく上手だと思います。遺族のお婆ちゃんにすれ

ば、小泉首相が自分の夫に感謝と敬意を捧げてくれることによって、宗教的に慰められ、癒されるわけですが、これを下手にやるとこうなります。英霊にこたえる会が産経新聞に1面広告を出しました。「日本は侵略国ではありません。英霊は侵略戦争の加担者ではありません」。これをやさしく言うと「ねえ、お爺ちゃんて悪い人なの？」であり、小林よしのりの「じっちゃんをいじめるな！」というフレーズになります。

死を納得させられる側と、納得させる側があり、させる側の仕掛けとしてあるのが、「ありがとう（感謝）」です。靖国神社を教える戦前の教科書は当初「国のために死んだ人」でしたが、途中から「国のために尽くした人」に変わりました。「国のために尽くした」と言えば、「立派なことをした」、「ありがとう」ということになり、「国のせい」で、「戦争のせい」で死んだという意味が完全に無くなります。「国のせい」なら、戦争を始めたのは誰？戦争に引っ張っていったのは誰？と、その原因に目が向き、国のせいで死んだのだから国に謝罪して欲しい、「ごめんなさい」と言って欲しいということになる。ところが、「ごめんなさい」の代わりに褒めてもらって、癒されている。

お母さんが子どもを叱る時に「ごめんなさい」とセットで使う言葉が「ごめんなさい。もうしません」であるのに対し、「ありがとう」とセットにされるのは「ありがとう。今後ともよろしく」です。中曾根や小泉が言う「感謝を捧げる。それなくして誰が今後よろしく戦争に行ってくれるか」ですが、遺族はこの「ありがとう」と「ごめんなさい」を混同するように出来ています。「お爺ちゃんは悪い人？」「お爺ちゃんは立派だったと言ってあげたい」という気持ちは十分に理解できますが、これだけだと「お前もお爺さんを見習ってイラクに行け」ということになるわけですし、遺族の皆さんには是非ここを越えて欲しいと思います。

死んでからの差別

靖国神社は戦争で死んだすべての人を祀っているわけではありません。空襲で死んだ人、戦争に反対して死んだ人は祀られていません。「戦病没者遺族等援護法」に基づいて厚生省が戦没者として決めた人だけが祀られています。最も悲惨なのは沖縄の民間人の死者です。ガマ（壕）の中でまさに日本軍によって殺された人、ガマから追い出されて死んだ人、あるいは作戦上「自決」といっていますが、集団強制死させられた人々は、国のために尽くして死んだわけではないので靖国に祀られることはない。沖縄では、軍人軍属だけでなく準軍属として遺族年金をもらっている人がいますが、自分で報告書を書かなければならない。「ガマから追い出されたのではない。積極的に陣地を提供したのだ」と。つまり、戦争に協力したと書かないと準軍属とは認められないということで、

極めて卑劣なやり方だと言わなければなりません。

遺族に遺族年金をもらってはいけないと言えませんが、今の差別的な補償は、「補償」ではなく「報奨」であることを考えなければならないと思いますし、そんな意味でも「ごめんなさい」と「ありがとう」では全く違うことを明らかにする必要がありますと私は考えています。

「ありがとう」論を論破する必要性

私たちの裁判は、小泉首相が靖国神社に参拝したのは信教の自由と政教分離に違反しているというものですから、裁判所が「政教分離に違反している」と言えば大勝利なわけですが、実は、この訴訟は反戦訴訟であり、戦争を止める訴訟であり、殺させないための訴訟です。だから、自分は神道ではないから靖国神社に祀られるのは嫌だけど、他の、自分の宗教でなら構わないというものではありません。確かに、これまでの日本における政教分離訴訟はこのような信教の自由をテコにして闘ってきましたが、私たちの訴訟はそういうものではなくて、「殺さない、殺させない」ための闘いなのです。

最後に、大東亜聖戦大碑において無断刻銘した側がいっこうに恥じようとしていないのは、「ありがとうと言ってあげているのに、いったい何の文句があるのか」ということで、まず、この考えを打ち倒さなければ、大東亜聖戦大碑を倒すことは難しいのではないかと思います。

国の責任を認めた画期的な判決



中国人強制連行・強制労働新潟訴訟支援の会
事務局次長 片桐 元

現在、新潟では拉致問題をきっかけに排外主義が高まっており、戦時中の強制連行は全く取り上げられずに70年代の連行の事ばかり言い立てていますが、具体的な史実を突きつけていくことが大事なことだと私は考えています。

新潟の中国人強制連行裁判では、原告12人のうち来日することが可能な8人に証人として出廷してもらった関係で大変お金がかかりましたが、有意義な証言が出たことなどもあって、総額で8,800万円にのぼる賠償金を国と企業に命じる画期的な判決を勝ち取ることができました。

99年の段階では、原告1人による代表訴訟という形式で裁判闘争を進める予定でしたが、原告は多いほうが良いだろうという弁護団の意見もあって、訪中して生存者と会い、8人を追加しました。また、現地調査を進めたところ、生々しい証言をしていただける方3名とお会いすることができ、私たちの裁判に加わっていただくことになりました。

公判では、ひどい食事のこと、よく棒で殴られたこと、ケガをしてもまったく治療をしてもらえなかったこと、さらに、901人が連行され、うち159人が亡くなったことなどが証言として出され、特にノミが大量に発生する宿舎に押し込まれ、賃金ももらえず、新潟の冬の厳しい寒さに耐えながらどうにか生き延びたことに対して、被告の新潟港運（現・リンコーコーポレーション）はほとんど反論することができませんでした。

唯一の反論は、被告側の弁護士が「風呂に入らなかったというが、中国の奥地の人には風呂に入る習慣が無いのではないか」と問いただしたことですが、差別的な発言で問題ありと抗議したら、「そんなつもりではなかった」と釈明する有様でした。

ところで、今回の判決は労働管理での「安全義務違反」を企業だけでなく国にも認めたこと、さらに「時効」についても、原告が損害賠償請求権を行使することが事実上不可能であったとしてこれを認めず、「国家無答責」（国は明治憲法下の損害賠償責任を負わない）も相当性を欠くとして否定するという本当に画期的なものでしたが、何と云っても「現場検証」をやったことが大きかったと私たちは考えています。新潟港運は全国でもめずらしい私有の埠頭を持っている会社ですが、今も60年前とまったく変わらないところがいくつかあります。そこへ裁判官やマスコミを連れ出して、証人に具体的な証言をさせたわけですが、その臨場感あふれる証言が実に効果的であったと思います。

今回の判決を不服とした国と企業が控訴したため、10月20日から東京高裁で控訴審が始まります。引き続きのご支援をお願いします。

以下は、鄭琪永(チョン・ギヨン)さんが私たちの集会に寄せたメッセージの全文です。一部読みづらい部分もありますが、原文のまま掲載しましたので是非ご一読下さい。

大東亜聖戦とは大きな間違いだ

この頃私は面白いことを見ている。歴史は繰り返されるといいますが、日本のその昔の亡霊が生き返って戦争を起こすのではないかと錯覚する。どんなに靖国神社の参拝をするなど中国や韓国がマスコミで警告しても、ある日ひょっこり小泉日本首相は羽織袴の謹厳な姿でそこに現れる。心の中でいくら何と言おうと「私は行く」これだ。

さらに日本は戦後そのいやらしい戦争はまっぴらご免と憲法にその建前で自衛隊を膨大な予算で武器、軍艦、戦闘機を準備するかと思う瞬間、イラク事態の発生を機に出兵の段階にまで及んだ。戦後その責任を問われ戦犯として処断された軍人の霊を慰める。それに外国出兵ともなれば、軍国主義の回帰をいくら口で否定しても誰がそれを信じるのか。それは嘘である。今日、皆様をご覧のように「大東亜聖戦大碑」が目の前に聳えています。

私もこの前に立って開いた口が閉じられないです。2千万名の死者と数えきれない多くの被害を残したその戦争から断罪されて既に60年が流れた今、これ何のうわごとですか。大東亜は何故、聖戦は何ですか。東亜を飲もうとしたあげく失敗したからその次は世界なのか、10数億の支那人民が未だその悪夢からさめず、36年の植民地からその恨みまだ消えやらぬ今、そしてその他の多くの東亜の国々と多くの民族がそのむごい仕打ちを忘れていない今更、聖戦云々とはとにかく何ですか。私の生涯にその単語をまた聞こうとは夢にも思わなかった。

私は誰が何と言おうと日本を最も深く理解する人だ。小学、中学を故郷で日本語で勉強したのは勿論、この隣り富山で高校3年、東京大学で2年半、それに朝鮮人学生であった。なぜ戦争に出さないかの叫び、学徒特別志願兵にとられて1年半余の支那戦線従軍、私は日帝に関する限りプロだ。それでなくてもこの頃韓国では親日派云々の声が出ている。私は学日、知日それ故に親日か。

さて、私の事はこれまでにして日本の皆様はどうか。おびただしいかけ声に符られたおかげで、50万人の無辜な人が命を失った。原爆で20万余の犠牲

を出した。多くのエリート学徒が戦場で無念の死をとげた。太平洋のもくずとなった人間爆弾で神風の名のもとに知覚の特攻、それに震洋の爆弾潜水艦、今も日本学徒兵の集い「わだつみの声」会のうめきは何ですか。

駄目です。こうするんじゃないのです。日本の今のあり方を見て何も知らない戦後世代として20、30代の日本の若者の平和愛好を願うその純真な顔を思い浮かべる時に、戦争世代との完全な乖離を見ます。政治は常に変わるものです。左向きでも右向きでもそれは時には変わるものです。人の考え方もそれこそ自由です。しかし、絶対に変わってならないのは人類の平和です。これからの日本に私は戦争被害者の一人として次のことだけはあってはならないとあえて忠告します。

1. 大東亜戦争は決して聖戦ではない。少なくとも東南亜を支配するための侵略戦争である。東亜の盟主を狙い他の民族を虐めるあってはならない戦争行為である。これを美化したり、あったことをないことに糊塗するのはまた一つの犯罪行為である。
2. 少なくとも韓国問題に対して日本は永遠にその責任から逃れることができない。今の韓国は60年間の永い間分断状態である。日蘇不可侵を裏切りわずか6日間の戦争介入で分断国となった。その原罪はあくまで日本が負わねばならない。挺身隊の美名のもとに軍人慰安婦に狩り立てた韓国女性への反人倫行為は決して許されない。永遠につくなくべき重大な問題である。
3. 侵略戦争はどんなに悲惨なものか日本の痛烈な自省が望ましい。時により変な突出着想はやめてほしい。今、ここに建てられた碑石は大きないたずらだ。パフォーマンスとしてはあまりにも拙作だ。あってはならない事はなるべく早くなかった事にするのが最上の策である。処分如何はここに参席した皆様、即ち日本の知性に任せます。

2004年8月6日

1. 20同志会 会長 鄭 琪永

「大東亜聖戦大碑」をめぐる主な動き

* 昨年(2002年)の第3回全国集会以降の主な動きを紹介させていただきます。

2003年 8月 6日 石川県に対する再申し入れ・交渉

設置許可に関するガイドラインの作成や歴史認識学習の強化など4項目について再度申し入れを実施。

唯一、「年内にガイドラインを策定する」と答えたことを除けば官僚答弁の域を出ず、歴史認識と許可手続きに重大な誤りがあったことに対する反省は今回も示されなかった。(ちなみに、年内策定を約束したガイドラインはいまだに策定中とのこと)

9月26日 北京テレビのクルーが来沢し、中田清康氏にインタビューを実施

金沢市内にある大東亜青年塾にてインタビューを試みるも、双方の主張は全くかみ合わず。「先の戦争は中国を解放したまぎれもない聖戦であり、中国人はもっと日本に感謝すべきだ」との中田発言に対して、さすがのクルーもあきれ顔で早々に退席した。

2004年 3月26日 韓国訪問・交流団を派遣

大碑に無断刻銘されている朝鮮人特攻隊の遺族探しと昨年の全国集会に参加していただいた李熙子氏との再会・協力要請を目的として訪韓団2名を派遣。

卓庚鉉の従兄妹である卓貞愛氏との面会が実現し、同氏は「大碑の存在はもちろん、そこに刻銘されているという事実をはじめて知った。(無断刻銘に対して)抗議することまでは考えていないが、私たち遺族が同意したものでないことを明らかにすることはやぶさかではない」と述べる。

5月15日 撤去の会第4回総会を開催

今後の運動のあり方、方向性についてフリー討議。

問題の所在を幅広く県会議員に訴え、連携できるような運動が必要との意見が出されたほか、目に見える形で結集軸を作ることが必要。会として独自のモニュメントづくりなどを検討してみればどうかといった意見も出された。